

今回は兵庫教育大学松田吉郎教授のご指導の下で、一ヶ月ほど寧波産の梅園石と東アジア海域交流というテーマについて研究した。研究経費の支持の上で、兵庫教育大学の図書館で資料や文献をまとめた上、寧波産の梅園石で作られた薩摩塔のある鹿児島県を四箇所周り、調査した。

#### 一、梅園石という石材

寧波郊外の梅園村で産出している石材は凝灰岩質ではあるが、日本の一般的な凝灰岩とは異なって、非常に目が細かくて、硬質な石であるため、立体的、写実的な彫刻が可能な石材である。色調は中国語で淡い梅紅の色を呈し、現地では、今でも、高級な建築用石材として珍重に使用されている。鹿児島県にある薩摩塔は年数変化などによって、表面がやや風化しているものの、全体的にやはり淡いピンク色を呈しており、その色調や質感は梅園石に酷似している。おそらく九州の薩摩塔は梅園石を原料としている可能性が高い。

#### 二、薩摩塔の来歴

薩摩塔の分布は、九州島西部を中心としていることが明らかであるが、今回調査した鹿児島県では、下記の五ヶ所に現存している。

(1) 南九州市川辺町水元神社前方にある。付近の運朝寺跡から発見されたと伝えられている。(川辺町郷土史編集委員会 1976年)。(2) 南九州市川辺町神殿にある虎御前供養塔の上に重ねられている。市指定文化財となっている(『広報かわなべ』1961年1月号)。(3) 南九州市川辺町諏訪運動公園にある。(『毎日新聞』1961.11.20)。(4) 南さつま市坊津町坊津歴史資料センター輝津館現存。(『町報ぼうのつ』1969年12月号) (5) 霧島市隼人町沢家墓地現存。(黒田 1974)

「薩摩塔」の名称について、黒田清光氏は「昭和38年京都の斉藤彦松教授が、薩摩の梵字資料調査のため川辺清水磨崖を視察された際、水元神社境内にある石塔と公民館に保存されている残欠石塔で川辺町に三基、坊津町に一基ある石塔が、薩摩独特のものであるところから薩摩塔と命名された」と記している(黒田 1974)。だが、昭和36年発行した『毎日新聞』の記事にその名が見られているので、おそらくその名を借用した。

#### 三、薩摩塔の産地

薩摩塔に使用される石材は、周辺に類を見ない特殊な石材とされ、それゆえ異なる地域から搬入された可能性が高いと指摘されている。「にんプロ」のメンバーである高津孝氏と亡くなった岡元司氏らは2006年、寧波東銭湖付近にある宋氏一族墓地前道の両側に立っている彫刻の文人、武将、馬、虎、羊などの五類が淡い紅色を呈しているため、石材のサンプルを鹿児島へ持ち帰り、化学分析したら、データが一致していると驚いた。

#### 四、東アジア海域交流

薩摩塔の産地は明らかに寧波の郊外の梅園村であるが、いつの時代、どういう理由で、どのように鹿児島を始めとする九州地方に運ばれたかというのは今後研究する課題である。